時事新報

第千五百五號　月曜日

明治二十年二月七日

舊丁亥正月十五日（癸、卯）

日出午前六時五十七分　日入午後五時三十二分

月出午後四時十九分　月入午前十一時二十六分

滿潮午前四時二十二分　午後四時五十一分

（西暦一千八百八十七年）

時事新報

民業次第に衰ると如何せん

開國三十餘年來我日本國人は官民共に大に奮發し西洋の文明開化を學ばんとして舊物を愛しむことなく舊を棄て丶新を求め進歩駸々底止する所を知らず殊に維新以來政府の部分に於て百事の擧りたるは實に著しきものにして諸官省廳の制度文物より官員社會の交際法に至るまで全く舊陋習を脱して新文明の風を催し之を彼の舊幕府時代の樣に比すれば其文不文天淵の相違にして西洋諸國人が今の日本を評して新日本と云ふも決して偶然にあらず實に盛大善美なりと云ふ可し然りと雖ども凡そ人間世界無代價にて得らる可きものとてはなる可らず政府の筋にて斯くまでの美を致さんとするには自から其費用を要すると當然の數にして我人民も悦んで之を負擔しされども今は其力のあらん限りを盡して此上に奮發の氣色なることなし又政府の方に於て其財を費やすも自から浪費と知りつ丶費すにあらず常に謹儉の旨を示し例へば彼の皇居の御造營すら數年來の議にして今日尚未だ成らざる程の次第にして深旨の所在を窺見るに足る可きなれども文明は立國の大本にして此議論の中にも財を愛しむに遑あらず以て天下經濟困難の今日に達したることならんのみ是に於てか將來の事態を推測して此困難を免かる可きの道あるやと尋ぬるに殖産社會は都て衰頽して回復の見込あることなし時に或は其地方には何々の業を起して云々の民利を致したりなど取囃すものなきにあらざれども唯局處の評判のみにして之を全國の民業に照らし見れば實に大海の一滴、論ずるに足らず其趣を喩へて云へば初秋の時節暴雨洪水地方の西より東より其報道を聞けば日本國中の田地は悉皆流失したるかと疑はる丶程の慘狀なれども秋収の時に至りて實際を見れば洪水の災決して大ならず唯各地の一局部にして全國収穫の數より見る時は九牛の一毛たるが如し左れば人間社會の變動出來事は事實よりも評判の騒々しきものにして彼の各地方に業を起して民利を致したりなど云ふ其評判も實際に於ては僅に水の一滴、牛の一毛たるに過ぎざるのみ蓋し一國殖産の事業は民心の向ふ所に從ふこと固より論を俟たず民心爰に新にして新事業も隨て起る可き筈なるに今我輩は虚心平氣以て廣く天下の殖産社會と見れば眼中唯士百姓素町人あるのみにして文明開化の在る所は甚だ寥々たるが如し試に各地方を巡回して竊に農民の樣を見よ都邑に行て町家の家道を見よ口に如何なる言を言ふて手に如何なる事を爲すや依然たる舊幕府時代の百姓町人にして文明の何事たるを知る者は甚だ稀なると發明することならん今その文不文の割合如何を尋ねたらば日本國中新暦を用るものと舊暦を用るものと其多少の數に等しと云ふも當ることならん改暦以來既に十數年を經たれども純然たる民間には之を用る者なくして或は新暦日を政府のものと視做し御上の歳末、縣廳の正月など云ふ者さへ少なからず此邊の事情より推して考れば百姓町人輩は今の文明の事業を見て少しも其意味を解せず心の中には之を御上の文明、縣廳の開化と合點することならん斯る民間に新事業の起る可らざるは明白なる數にして其殖産の働は三十年前の働に異ならずと雖ども政府の財政の依て以て立つ所の財源は唯この士百姓素町人なるのみ左れば今日政府にて文明の事を行ふ其資本は正しく不文なる人民より來るものにして其文明の外見が如何に盛大善美なるも盛大善美なる人民の殖産を以て支ゆるものにあらず人民の殖産は恰も政府の事業の後楯なるに其殖産の起る可き目的なしとするときは其事業も亦永久す可らざるや明なり況や近年に至りては民間の資本は日に缺乏を告げ其缺乏いよいよ甚しければいよいよ商賣社會の信用を失ひ資本の走る處不生産（公債證書の如き之を不生産の資本と云ふ）の一方に偏して殖産商工次第に退歩をなすに於てをや政府の文明を持續するとまぞまぞ困難なるを知る可しなり然らば則ち今日の殖産の民業を起して此政府の困難を免かれしむるの法如何して可ならんと云へば我輩自から說なきに非ずと雖ども唯その時勢に行はる可らざるを恐るゝのみ試に之を次に述べん

雜報

○播州路の郵便物　大阪より播州地方へ發送する郵便物は元來陸運なりしが過般來其筋に於て大坂商船會社の汽船を以て海路より遞送せんとの經畫ありし所愈去月三十日林驛遞局長の名義を以て大坂商船會社へ搭載方を命ぜらる由右賃錢は毎日一回宛の發送にて四圓五十錢づゝなり又其寄港所は神戸兵庫高砂明石飾磨網干室津坂越の八箇所にして本月一日より實行せりと大坂よりの通信中に見えたり

○海外旅行券附與數　去る一月中外務省に於て交付せし海外旅券の數は米國行男九人、英國行男四人、佛國行男二人、獨國行男五人女一人、清國行男二人、布哇國行男一人其他歐米各國行男七人にして合計三十一人なり

○大坂堺鐵道會社收入　大坂府大坂堺鐵道會社に於て昨年十月より同十二月迄三月間の乘車人員は二十六萬四千六十九人にして其收入金額は九千九百二十七圓三十九錢八厘なり之を前季に比すれば乘車人員三萬二百八十二人を收入金千二百八十九圓七十六錢六厘を増加せり此増加は十月上旬に至り懸疫漸く撲滅し十一月に及びては氣候も稍々順當に復せしより閑ひて行旅も亦頻繁となりしに因る而して一日平均乘車人員は二千八百七十八人強に當れり（右二件二月四日官報）

○和歌山色染講習所　は豫て本紙上に記載したる如く和歌山縣下の綿フランネル製造者及び色染業等の有志者が醵金にて設立したるものなるが近頃同地より達したる通信に據れば昨年來新築の同講習所は落成を告げたるに由り去月十日移轉式を擧行し爾來入學生徒は日々に増加する勢にて第一期入學生は既に卒業の期も近づきたれば改良染の綿フランネルを和歌山より出すに至るは今より一二箇月の後ならん又同講習所にては今度單寧質の新媒染物を得たるが此物は五倍子よりは幾倍の利益あるものにて和歌山縣有田郡箕島村なる川村善之助氏の發見に係り縣下某地に產する一種の植物の實にして其名は未詳なれども同氏はタンエルチットと名付け昨今盛んに使用しをれりと云へり

○帳簿の調査　府廳農商課にては烟草賣捌證印紙帖用方并に昨十九年中賣上高帳簿調査の爲め官吏を各郡區の同營業人の許へ出張せしめたり

○公證書類引渡　芝區役所にて客月廿八日同區治安裁判所へ引渡したる公證書類の帳簿は三百三十一冊なりと云ふ

○學校移轉　芝御成門外の電信修技學校は元海軍主船局の跡へ引移りたるものなるが目今の所にては何分手狹の由にて今度舊海軍醫學校の跡へ移轉すると云ふ

○校舍新築　東京商船學校にては今度同校構内の古長屋を取毀ち其跡へ建坪二十坪四方の煉瓦石造の二階家を新築せんとて既に其工事に着手したりと云ふ

○福井通信（一月三十日發）上京　石黒本縣知事は勝田議事課長外一名を隨へ去る二十六日當地を出發上京し又樋口典獄も同日上京し萩原學務課長も此程上京を命ぜられたり尤も石黒知事不在中は第一部長遠藤書記官が廳務を代理せり○天然痘　過日電信にて報道せし如く本縣下にては過日來天然痘流行し目下足羽、吉田、坂井、大野、南條、今立、敦賀の各郡にも波及し死亡者百餘名感染者三百餘名にも至りたるを以て其筋にては目下夫々撲防消毒に盡力中なり○醫學校の再設　既に電報せし如く當縣立醫學校は二十年度通常縣會にて十九年度限り廢止し該校生徒へは千五百圓を給費して他府縣醫學校へ入學せしむることに決議せしに石黒縣知事は之を認可せず内務大臣の指揮を請ひたる處今回同大臣の指揮を得て金三千五百圓を以て設置することになりたるを以て議員中不滿を唱へ居るものも多し○老農巡回　石川縣老農宮口安躬氏は今回本縣農商課の聘に應じて本縣下各郡村を巡回せしが同行の林遠里氏は農作法と談話せり宮口氏曰く林氏の農作法に遵へば一反歩に付き六石內外を收穫し得べく現に昨年石川縣にては一反歩に付六石四斗五升三合を得たりと縣下農民の聽衆頗る多し○置縣紀念會　來る二月七日は去る明治十四年滋賀石川兩縣を割て福井縣を置きたる日に相當するを以て當市の劇場照手座に於て置縣紀念會を開き祝意を表せんとて有志者は東西に奔走し專ら其周旋中なり又市中の戸毎に國旗を揭げ町々には作り物、生花、盆栽、瓶花、吹拔等を建て夜に入れば球燈を揭ぐる等の目論見にて目下準備中なるが當日は定めて非常の盛況ならん○徵兵服役者待遇　本縣にては今回服役者待遇規約なるものを定め徵兵服役者を優待の方法並に服役者戰死若くは公務の爲め死亡せる時は弔祭料を贈與する等の規約を定め其費用は人民より出金せしむる趣にて人民中若し出金を肯ぜざる時は戸長役場へ召喚して說諭を加へ出金せしむる筈なりと云ふ○市中の景況　近頃當市中の諸物價は概して下向の景況にて米は一石四圓十錢位菜種は一石四圓六十錢內外鹽三田尻千俵に付九百三十圓位生糸上等手挽一梱三百十圓位同下等二百八十圓內外奉書紬は極上等百目に付四圓四十錢中等四圓位なり且つ舊暦正月中にて人出も少く市街寂寥たり花柳社會も門前雀羅を張るの有樣にて小室の爐を圍み情郎と對話をるものあるも絃歌の聲は殆んど聞かざる程なり

○朝鮮遊覽日誌

全羅道　　井上角五郎

群山（忠清道舒川郡より朝鮮里法凡そ三十里）

群山鎮はもと沃溝縣に屬しその土地は縣監これを治めその鎮政は僉節制使これを掌りしが八年前に及び全く割れて獨立となし土地も亦僉節制使これを治むることなれりいまその境域を案ずるに東南は沃溝縣に至り西は海にして北は鎮浦とす元と沃溝縣の一面なりしがいま二面となし十七洞に分つ實に東西三里南北十里の一小地なり戸數は合計七百にして鎮城近傍に二百五十戸四百三十八人あり鎮浦は忠清全羅兩道を分界し實に

節制使は毫も
本鎮所屬水軍
して傍近府縣
七處の貢米を
その運漕使と
毎度官斛二萬
することなきば
九隻水夫十九人
は毎年所得一
々一人將校六人
縣の貢米と集め
く砲手別哨共に
には未だ此の
二人あるのみ
をされども運漕
各處へ旅行の
丶繁昌せり鎮
して竜堂津と
東向之と一望
これに當り西
傍ゑ東南西三
南方鍋り稍廣
す鎮浦は尤も
を内浦に比す
り忠清全羅兩
んなり後日外國
べしと思はる
十一月三十日
來り一民家に
逗留するの二
邇近の山川好
卅四度あり
す氏は水原府
云ふ氏は來り
ふ余は武官な
もこれなしと
の任あり余は
れば日に土民
催促すれども
暇すら得難し
も無理あらぬ
年のコレラ
少なからず
もなは政府は
ければ其税
人民に割賦
これを諾せず
家内は無
上納せざる
に盡力すれ
ふ鎮浦の商
流凡そ百里
南第一繁華地
るべしと江景
り全羅道羅州
（編者曰す本
を掲ぐべき
は本日より改
に及ぶべし
○新刊書
發兌になりた
田宗伯、田中
のなり○文學
圖廿錢）と
は著者が
記の內
したるもの